

東寺觀智院金剛藏『本朝真言血脉第一—廣澤』（148箱4号）の調査報告と翻刻

湯 浅 吉 美

はじめに

東寺觀智院金剛藏聖教類の閲覧調査報告の一編として、
ささらに觀智院の皆様に衷心より謝意を表する。別けても
今は標題資料を探りあげる。最初に閲覧したのは平成
二二年（二〇一〇）であったから、干支一巡してしまった
ことになる。先ず以つて、久しく出番を待つていた資料
そのものに対し、何とも申し訳なく思う。

また、岸田照泰猊下をはじめ、大本山成田山新勝寺と同佛教研究所の方々の御高配も忘れることはできない。地味な基礎研究に對して惜しみなく注がれる御温情あればこそ、こうした氣の知れぬ仕事を継続することができてゐる。殊に、これまた例年のことなのだが、如何に遅れようともにこやかにお待ちくださる佛教研究所事務局の伊藤照鏡師には、まことに適切なる謝辞を見出しえないけれども、微意の所存を汲み取つていただきたい。

なお、本報告は都合により、書誌事項の記述と全文翻刻の提示とのみに止める。これまでにも何本か報告した血脉類や、周知に屬する『血脉類集記』『野沢血脉集』等と並べて、子細に検討すべき点が多々あらうが、十分な用意もなく倉卒の間に物することは、正に「百害あつて一利なし」なので、何事も今後の課題とさせていただく。忸怩たる想いに苛まれつつ、諸賢の御諒解をお願いする次第である。

とはいへ、最低限の内容紹介だけは記しておこう。

本資料を一言で言えば、寛助付法の法脈を記したものである。冒頭、寛助の名を起点として、永歟から実意まで、注記に「付法三十三人」とあるとおり三十三人を挙げている。この三十三人を第一世代と教えると、それらの弟子となる第二世代が二十七人、以下同様に、第三世代二十三人、第四世代十八人、第五世代十六人、第六世代十三人、第七世代二人、最も深い第八世代が一人で、合計百三十三人の名が見える。系図線は、寛助と第一世代の三十三人とを結ぶ最上段だけが朱線で、あとはすべて墨線。系図様のものを横方向に書き綴れば必然のことだけれども、横線が何本も積み重なつてゆく。これは系図集の雄『尊卑分脈』などでも事情は同じ、誰から繋がつているのか咄嗟に判らず苦労する。ちなみに、本資料では最大五本が重疊している。

相承の次第そのものはふつうに知られているとおりで、とくに目新しいことはないように思われる。個々の伝授記事は、ほとんどの部分を『血脉類集記』に見出すことが

できるが、しばしば補足的に同記にない文言が加わって

おり、そのような箇所には相応に興味を惹くものがある

かもしない。ただし、体裁や構成は同記とはまったく

異なる。また、少数ながら異本注記も見られるし、何箇

所か「或血脉云」として別の血脉を参照している様子も

窺われる。やはり本資料も、いわゆる「果宝ゼミナール」の研究テーマに即して蒐集された資料の一つだったのであろうか。委細は然るべき向きの精査に俟ちたい。

《書誌事項》

本朝真言血脉第一_{廣澤}（14箱4号『目録』8—396頁）^①

南北朝時代嘉慶元年（一三八七）写 一卷

【装訂】無軸卷子装。全長八米八六・〇糞。
【表紙】後補柿渋染茶色表紙、縦二八・四糞、横一七・六糞。^② 経典の反故紙か。

外題「本朝真言血脉第一_{廣澤}」（直接墨書）。外題下に

【寶菩提院】とあり（外題同筆、直接墨書）。

【見返・遊紙】見返に経文（裏返し）見ゆ。遊紙なし。

【序・目録】なし。

【本文部分】内題「本朝真言血脉第一_{廣澤}」。楮紙。紙数二二。標準一紙長三九・四および四〇・二糞。^③ 紙高二八・四糞。無辺無界。毎紙行数不等一八行内外。毎行字数不等。字面高さ約二八糞。最上段の系図線、および流祖の注記は朱書。少数の異本注記、および追筆あり。その他、訓点等なし。第二紙に一箇所の裏書きあり。

【尾題・奥書】尾題なし。嘉慶元年の書写奥書あり、翻

刻参照。

【その他】特記事項なし。

注

(1) 『目録』は、京都府立総合資料館編『東寺觀智院金剛藏聖教

目録』(京都府教育委員会、一九七五—八六年)を指す。以下の書誌事項には『目録』と相違する計測値などもあるが、報告者の実見・実測したところを提示し、とくに必要のない限り指摘・

注記はしない。

(2) 長崎盛輝『日本の傳統色——その色名と色調』(京都書院、一九九六年)の50番栗皮色。なお報告者は、書誌の報告において、こうした標準的な色見本によつて表紙等の色を記載することを提唱する。書誌学者は往々にして(とくに国文系の人は)、『延喜式』や襲の色目に登場する色名に執着するが、あまり客観的・科学的とはいえない。右の書が適當であるか否かは確定的ではないけれども、一応の目安にはなろう。何よりも、文庫版で手軽な点、出張調査の折に便宜である。

(3) 標準一紙長とは筆者が書誌事項の報告をする際に使用している造語である。文字どおり、当該卷子本を構成する料紙一紙の標準的横長を意味する。原則として最頻値(モード)を探るが、継ぎ目糊代に伴う誤差の範囲内において複数の最頻値が出るならば、その平均を探る。もともと複数種類の料紙が用いられている場合には、それぞれの標準一紙長を記載する。事々しいよう思われるかもしれないが、一葉ごとに採寸してゆくと、料紙利用の様態が鮮明に浮かび上がつてくる場合がある。たとえば、時や人を異にする書き継ぎ、推敲に伴う切断など。

《翻刻例言》

* 改行、傍記、小字片側寄せ、小字双行などの体裁は原本どおりとする。文字の大小、配置なども、努めて原本の様態を髣髴せしめるよう心掛けた。ただし、字間の空きについては十分には再現していない。

* 用字については以下の方針に従う。

JIS内漢字および『今昔文字鏡 単漢字10万字版』(東京、紀伊國屋書店、一〇〇一年)のTrueTypeフォントを用いて表現可能なものは、原本の字形を活かす。したがって、同じ字の新旧あるいは正俗の混在する場合がある。
それ以外の別体字は、右の範囲内に存する最も適当な文字に改め、必要に応じて翻刻注を施す。
「」くらいうに使われる別体字は、殊更に原本の字形を出わさずに通行字体を用いる(例えば、高→高、職→職、弘→弘など)。

文字の筆法によつては、筆写者がどの字形を書こうとしたものか判然としない場合が少くない。その際は、概ね通行の字形を用いる。

原本の字形を残すか、通行字体に置き換えるか、その判断にややゆらぎがある。とはいへ、よほど用字法などの検討に踏み込まぬかぎり、あまり厳格に呻吟することは、むしろ無意味であろう。

本資料においても、大と太、小と少など、他の資料でもらつうに見られる異字通用がある。これらについては、翻刻には原本にあるとおりの字を出し、一々(ママ)を付けなかつた。この方針による誤植の識別が困難という憾みもあるが、報告者はなるべく(ママ)を使わず、むしろ無闇に(ママ)を付けるのは好ましくないと思つてゐる。なお疑わしい場合には、報告者まで照会されたい(ezki01525@nifty.com)。

* 宿曜や役名などで一字略を示す「ハ」と「一」とは、形の近いほうを用いる。

* 本文文字の左傍に「×」、右傍に文字があるのは、い

わゆる見せ消ち、または、元の字が見える程度に墨線で抹消している箇所である。

* 括弧 () 内は、報告者の加えた字句を示す。

* 每紙、冒頭に紙数を示す。無論、系図線は原本では繋がっていない。

* 朱書は二重カギ括弧『』を以って括る。

* 系図線は最上段のみ朱線（翻刻では太線とした）、他は墨線である。

* \TeX では注の管理がすゝまる容易なので、原本所見に係る翻刻注は全て注として末尾にまとめた。なお、

この点は \TeX を採用するメリットの一つでもある。
といふて、今回は思うところあつて、翻刻注の文を

漢字・カタカナ交じり文としてみた。御意見を賜れ

ば幸いである。

* その他、一般的な翻刻に準じて解釈されたい。

《付記》

* 小稿は報告者自身が日本語版 W\TeX^2e (角藤亮氏によ

る) わゆる角藤版 p\TeX^2e) で組版し、大島利雄氏

公開の “dvout for Windows” version 3.11.4 によつて
印刷出力したものと版面として使用した。

* J-I の外漢字を組版するため、『今昔文字鏡 単漢字

10万字版』(東京、紀伊國屋書店、一一〇〇一年) の
TrueType フォントを使用した。当該フォントの著作

権は株式会社エーアイ・ネットならびに文字鏡研究
会にある。

* 前項のフォントを \LaTeX^2e 上で使用するにあたり、堀
田耕作氏によるフリーウェア Mjfonts パッケージを
利用した。

* これらのソフトウェア等を開発・公開された諸氏に
心より敬意を表する。

本朝真言血脉第一廣澤

寶菩提院

(後補外題)

(第1紙)

本朝真言血脉第二廣澤

(1)

〔性信親王付法〕
大僧正寬助

付法三十三人
位大僧都

于時年五十二 (2)

永嚴

卅四号下野法印 平等房 宝壽院 下野守平師季子

(3)

仁平元年八月十四日卒七十七 東寺二長者法印 權少僧都

天
仁平元
賀茂祭日也

嘉承三年四月十七日丁酉筭一於成就院授之色衆十人

(4)

教授兼覺阿、上堂步行有執蓋等 嘆德所敷座具

三衣菩 戒臥菩 香爐 如意置之

覺印
号自證房
下野阿、 師法印舍弟也

師年六十五 資四十二 (5)

保延四年正月廿三日己酉筭、於保壽院授之色衆十二人

教授仁嚴阿、誦、琳助阿、護摩源意阿、嘆德隆勝阿、

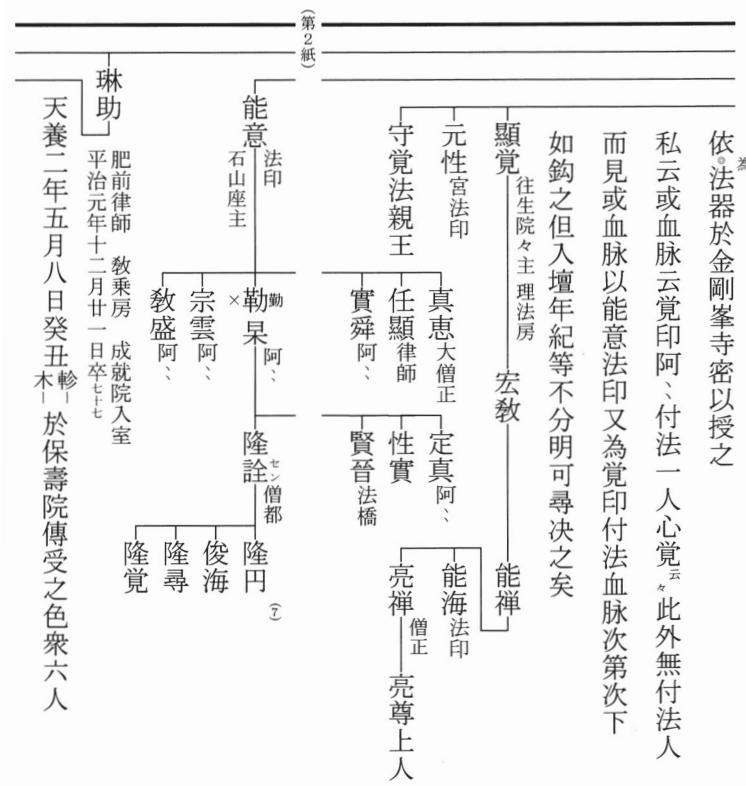
心覺

成喜院

(6)

八八

依法器於金剛峯寺密以授之



教授靜經法眼 詠、宗範阿ヽ、護摩覺印阿ヽ、

實叡公 保元々年五月十四日癸酉_{翼金} 色衆六口教寬果
周防阿ヽ 師年七十六

寛嚴 平治元年八月十八日 教、兼源

誦、行任 護摩深尊

能真 大輔阿ヽ
或血脉鉤之

覺曉 卅一大納言法眼 最勝院 靜意法印弟子
承安三年正月廿五日卒_{五十九}

久安二年二月十八日丁巳_{房日} 於保壽院受之色衆十二人

教授靜經阿ヽ、誦、慶成阿ヽ、護、覺印阿ヽ、嘆、隆勝阿ヽ、

長覺阿ヽ、左京大夫藤原顯輔卿子

同年六月三日辛丑_{星上} 於同院受之色衆十六人 教、靜經法眼

誦、隆勝阿ヽ、護摩覺印阿ヽ、嘆德行任阿ヽ、

長惠五十三 擬灌頂

(第3紙)

同五年八月四日癸丑_{房水} 於鳥羽安樂壽院僧房受與之

色衆六人 教、靜經法眼 詠、隆勝阿ヽ、護摩覺印阿ヽ、

禪壽四十八 少僧都 中納言俊忠惣息

同六年九月十二日乙酉奎一水一於安養房受與之色衆八口
教、靜經法眼誦、慶成阿、護摩覺印阿、無嘆德
教、靜經阿、誦、宗範 護摩覺印阿、嘆德琳助神供覺明

行任四十九

當灌頂不遂觀音院卒

同年十二月廿一日己巳弓一月一於保壽院受之 色衆十口

教、靜經阿、誦、宗範 護摩覺印阿、嘆德琳助神供覺明
一品法親王御年十九法名覺法白川院第四王子号北院
御入滅後稱高野御室或記云御本名行信

天仁二年子戊四月十六日進奏狀當日官符下同廿九日癸

卯觜一月一於觀音院灌頂堂傳授兩部傳法灌頂職位行儀

作法皆依舊記被行之依煩委不記但御教誡作法於堂

內在之雖然不失例故觀音院御所南西懸御簾內

安御三衣菩許御堂事有之大阿闍梨不令承御

拜給御卑下之儀欵 如例於殿上廊受供被物等

事在之持金剛衆十六人讚衆十四人衆僧前四人

貝吹持幡等如常 教授 寛智律師 誦經定尊阿々

護摩 隆真阿々 嘆德 禅譽律師 上達部殿上人

等參會取布施

大阿闍梨布施 法服一具 鈍色裝束一具
被物三重 裹絹一百疋 色衆卅二人各一重

卅疋 所作人等皆加布施

範覺

卅四 改世毫 摄津法印 心蓮院 筑前守基實息 (8)
仁平三年五月四日卒七十八

天仁二年九月一日壬寅(21)於成就院受之色衆六人

無列有教誡

長幸 (卅四) 侍從大僧都 四位侍從宗信朝臣子三長者

承安三年八月十三日卒七十二

師年七十

天養元年(甲子)十月廿七日甲辰(房木)於心蓮院傳受兩部傳

法灌頂職位 色衆六人 教授頴意阿々 誦、兼賢阿々 護

摩兼助阿々 道具北院

禎喜

四十六 円城寺大僧正 四位侍從宗信朝臣子 一長者

壽永二年十月一日卒八十五

同年十一月二日己酉火於同院授之 色衆十二人 教授頑意阿、
誦、兼助阿、護摩長幸阿、嘆德兼賢阿、道具同

公祐法眼卅七石山僧都 三条内大臣公教子

嘉應二年十二月四日己酉辟一月天晴於東寺灌頂院受與之
色衆十六口

權大僧都長幸三長者 定遍嘆德 權少僧都禪壽護摩

法橋隆曉教授 已灌頂顯毫誦經、顯嚴或誦經云々

大法師重助

印成已上衲衣

延果阿闍梨散花

任繼阿、宗惠阿、兼證入寺理明房

覺延、

寬玄、實喜阿、信嚴已上讚衆

執蓋役威儀師宗嚴 緝取從儀師實雅公文從儀師良慶

自當院四足行烈 上堂戌亥角立障子為護摩所後

朝作法於西院有之受者自灌頂堂乘輿西院四足

自此所引烈於新東北廊南庭有嘆德事布施取公卿
權大納言實房 治部卿光隆 左衛門督實國
參議資賢 左大弁宰相實綱 殿上人七人
抑當寺傳法灌頂事醍醐宮僧正以後於此寺無其
儀年紀百十四歲寺務長者十七人也而此時仁和
寺本房依无其便宜被修之欵道具定遍沙汰云々
以長幸僧都說粗記云々

延果阿闍梨

宰相僧正 大藏卿藤長忠子云々
円成寺法務大僧正一長者

嘉應二年十二月十日乙卯觜一小雨夕晴於同寺西院
受与之色衆十口

法橋隆曉教授 已灌頂顯毫護摩 顯嚴嘆德

大法師印成神供 任繼誦經已上 實喜已上
衲衣

信嚴 寬玄 兼證 覺延 已上讚衆

於客殿簾內三摩耶戒并初後作法云々為西廂護摩所

真惠

廿九 侍從法印 法務大僧正 一長者

金剛幢院

源少將通能息

建久二年十二月十六日庚寅張木於忍辱山受之 色衆八口

教授宗元僧都 誦經俊耀阿、護摩靜觀阿、嘆德親嚴已、

有果權律師三十 師年六十一

從三位有通卿子天福後朝範藉一年六月十日頓滅四十七⑨

貞應二年四月廿一日癸巳月於南院受之色衆十六口

權律師俊嚴咒護摩 玄朝嘆、實瑜唄誦經、

大法師経隆散、 教授權大僧都教源勤之色衆外

十弟子六人 持幡幢童々部不天冠

賢濟三十 少將 宗經朝臣子

安貞元年十一月五日庚辰室火於仁和寺西院授之

色衆八口 有果教、俊嚴護摩 嘆、任顯誦經、

仁教阿闍梨廿三 大眾 兵部卿三位有教子

貞永元年十二月十日乙酉背於金剛童院受之

⑩

色衆十六口 俊嚴咒、有果教、嚴遍嘆、

誦經導師布施侍從行通取之 十弟子六人

布施取 中納言定家 賴資 大貳光俊以下略之

⑪

三摩耶戒後朝饗等以料沙汰送云々

玄曉阿闍梨四十二

同十五日庚寅奎水於同院受之色衆十口

權大僧都有果先受教源僧都、權少僧都嚴遍印遍、權律師円遍誦經、
真尊護、

堂上一行列

布施 大阿闍梨綾被物五、裏物 法服 橫皮

念珠 絹裹五 布施役 有果 定瑜

賴譽 尊惠 證惠

真尊權律師四十八重受少納言法印

拂忌 後朝^五衰藉

12

文曆二年三月九日壬寅奎、於金剛童院受之色衆八口
權大僧都覺助^唚護、^咒權律師円遍誦經、大法師仁教教、
十弟子四人

覺助權大僧都四十一 重受

後朝五墓厭對

嘉禎元年十月五日甲午女^金於同院受之色衆八口

權大僧都真遍^教、^咒俊嚴^唚護摩^咒權少僧都^{誦經}、
廿五中納言 權僧正

嚴遍

賴譽阿闍梨

入道中納言賴資子

同十二月十二日庚子^井、雪降於同院受之色衆十二口

俊嚴^唚護、^咒覺助教授 任顯嘵、円遍誦經、

(第8紙)

綱取五位 執蓋六位
或^血目^ニ賴譽^ノ下ノ 已下人々不釣之一 良恵大僧正方ノ 賴譽ノ 下ニ釣之一 如何
守^目仁裔
守^目守譽

定譽 親遍 寬惠 賴猷 朝薈

〔延景〕
教源阿闍梨 四十八 摄津僧都 少将源信雅子

建久五年八月廿六日甲寅翼一月一於大教院房受之
色衆八口教授真惠阿、誦、定円法橋 護摩親嚴已、

教遍

承久元年四月廿一日於八幡坊受之色衆八口師主年七十七

大法師能忍教授真尊

真尊阿闍梨卅六少納言法印

貞應二年十一月廿八日丙寅斗於同坊受之色衆六口

大法師演真 琳惠 隆詮 賢濟

演真阿闍梨五十八 少輔

同三年三月九日於同房受之色衆八口

大法師任顯琳惠真尊教、義寬隆詮賢濟

實深阿闍梨五十九 讀岐大僧都

嘉祿二年十月廿七日己酉胃一於同房受之

色衆六口 真尊教

實尚阿闍梨大輔 大外記師尚子

建久九年十二月七日庚午火一於靈鷲寺受之

師位僧正

有遍阿闍梨廿八改長豪 大輔法眼 光明院

安能僧都真弟子 法眼式部少輔在長孫

正治二年六月三日丁亥星一於成就院授之于時大僧正後朝欠日也

色衆十二口權大僧都宗元護摩 權律師真惠教

已灌頂

隆惠教源

大法師宗禎

散花

寬禪

靜親導師

顯禎

頭

真遍

實尚

教果

頭

顯賴

阿闍梨

私云或血脉鉤也

長喜
覺綱阿闍梨

宮内卿律師

14

宮内卿師綱子

承安二年十一月十六日辛酉

柳月一 東寺西院

於同院受與之色衆十二口

15

教授覺成法眼
誦、寬杲 護摩隆曉 嘆德任繼阿、

今度初後作法於內陣妻戶內在之

宗惠阿闍梨少納言僧都

左近將監宗清子

同十二月八日壬寅

昂日一 於同院受與之色衆十口

教、隆曉法橋
誦、寬杲 護摩顯嚴已講

曉明

大阿闍梨布施新車一両調進之是希代事也

宗元阿闍梨

大納言大僧都
内大臣宗能息

同四年三月廿八日乙卯胃一水於姊小路大宮所授与之色衆
教授延杲、誦、任繼阿、護摩濟元、嘆德顯毫已講

寬房法橋

任遍律師

兼證已講

長惠

已上四人或血脉烈之

嚴仁六十一
天養元年
阿闍梨

同年十一月十四日庚寅トラ月一於同院受之色衆十人
心蓮院

16

教、禎意阿、誦、寬繼阿、護摩禎喜阿、嘆德兼賢阿、道具同

俊證」四十二心蓮院僧正中務大輔能明子
建久三年三月十七日卒八十七

久安三年七月廿日壬午昂月一於同院受之色衆八人

教、寛繼阿、誦、兼賢阿、護摩長幸阿、道具同

俊遍害相律師 心蓮院 民部少輔源延俊子

壽永元年十二月廿二日於心蓮院授之色衆六口

教授行宴 誦經榮舜阿 護摩定毫

兼信阿闍梨 少將法印

同二年四月廿日於同院授之色衆六口

教一行宴 誦、榮舜 護摩俊遍阿

榮舜阿闍梨 駿川律師

文治四年十一月 日

證尊阿闍梨 少納言僧都肥後入道資隆子

信繼大法師 嘴已講

文治五年十二月十九日甲辰角一金一於同院授之

色衆六口 教俊遍律師 誦、榮舜阿、護摩任繼律師

俊性阿闍梨卅一 治部卿大僧都

建久元年四月廿日癸卯虛金於同院授之色衆八口

教一俊遍律師 詠、兼信已 護摩行宴法眼

行讚阿闍梨筑後已講

同二年十二月卅日癸酉室木於六条西洞院壇

所授之色衆六口 教一俊遍律師 詠、靜曉阿、護摩兼信已

『世毫』

本名覺尊 三十六 治部卿法印 相應院治部卿大納言俊子

能覺

壽永元年五月十二日卒 年六十六

仁平二年二月廿五日庚寅危十二於同院受之色衆十二八人

心蓮院

教一

寬繼阿、長幸已講、誦、兼賢阿、

護摩長幸阿、道具同

嘆德禱喜已、

⑯

⑯

17

改明覺 律師 式部大輔敦光朝臣子

壽永元年五月十八日卒

同四月廿九日癸巳觜火於同院授之 色衆六人

教一禱喜已灌頂 詠、俊證阿、護摩寬繼阿、

顯毫

改明覺 律師 式部大輔敦光朝臣子

壽永元年五月十八日卒

明憲 嵯峨攝津阿、 摄津守家房子

天仁二年九月二日癸卯房一月一於成就院受之無烈色衆十人

誦經導師定覺阿、 依有非器聞被召返付屬物云々

覺顯廿一三位律師 修理大夫顯季卿息或僧綱補任云生年九歲補保延二年五月十三日卒三十六內供奉十歲補阿闍梨

天永二年四月八日庚子張一於觀音院受之于時內供

色衆廿人之中僧綱二人 教授禪与律師 誦經、定尊阿、

嘆德寬智律師 護摩行暹

始自丑刻迄于翌日午刻大風大雨崩屋拔樹其數

巨多及午後漸以天晴後朝儀式

(第13紙)

觀惠卅七周防法印 円楽寺周防守敦基子

同年九月廿一日辛巳柳一於成就院受之色衆十人

最嚴卅三出羽法橋 仁和寺傳法院學頭高野御室教相師也

同月廿二日壬午星一木一於同院受之色衆六人教授定覺阿、

非職入壇事先年之比雖被止之今枉被聽之了

慶嚴^{経才}
三品親王^{御年十九}
白川院第五皇子^{法名聖惠}

紀伊阿：

同年十月十五日甲辰^觜於同院受之色衆十人無列

二品親王^{御年十九}
白川院第五皇子^{法名聖惠}
花藏院²⁰

天永三年九月廿一日師主僧正蒙勅許可授灌頂於聖惠

上奏狀同月廿八日壬午^{弓日}於觀音院傳受之色衆廿人

教授源覺阿、誦、定覺阿、護摩隆真阿、嘆德定尊阿、

靜經^{廿三}
仁平二年月日卒
二位大納言僧都 大納言藤經實子

永久二年十一月十九日庚寅^翼於成就院受之色衆十六人

教、兼覺阿、護摩、誦經、忠緣法橋、嘆德定尊阿、

大阿闍梨布施香染法服一具先日進上僧正以後是最

初御裝束被進之此日白川新御願御佛被奉居并
鎮壇大阿、參懃仍申刻歸入酉刻三摩耶戒入夜

翌日已刻親父大納言引率人々參會後朝未刻

實寬卅五備後前司源行實子

同四年二月廿六日庚寅室月一於成就院受之色衆十人

教兼覺法橋誦、兼成阿、護摩隆真阿、嘆德嚴寬阿、

仁嚴卅四常陸律師真淨房
仁平二年八月廿九日卒六十九或七十一

同五年十一月六日庚寅辟土一於同院受之色衆十人

教兼覺誦、兼成阿、護摩最嚴嘆德觀惠

有蓋無輿雖敷筵道不立庭幡綱取惣在序靜算

威儀師賢禪執蓋同兼俊各着赤袈裟

寬顯五十二少將法律勝功德院陸奧守源信雅子
養和元年二月九日卒八十四

久安六年十二月廿二日甲子房木一於大教院北房授與之

色衆六人教護、俊證誦、慶成阿、

定延卅一侍從阿、左馬權頭藤原能定子

仁平元年十一月廿二日戊午亢月一於同院授之色衆六人

教一護一寬顯誦、兼賢阿、

仁寶 嘴阿闍梨入寺也

同二年八月廿八日庚寅角月於同所最後只授与印可云々

兼譽四十四宝生房阿、

成就院

同月十六日庚子妻月於同院受之色衆八人教一兼覺

誦、隆真阿、宿裝束平袈裟從緣一行烈 後朝無作法

卅三式部僧都般若寺土佐守藤盛實子或家能息

仁平三年三月一日卒六十七 四長者覺意僧都入室

覺任

同六年二月廿九日辛巳妻金月於同院受之色衆十人

教一兼覺誦、俊与護摩隆真阿、嘆德定實阿、

最尊卅一 淡路阿闍梨

久安元年六月廿九日癸卯柳金月於威德寺授与之色衆六人

教一宗範 誦、寬然護、禪寬神供覺明

重助四十八阿闍梨

同六年十一月廿八日庚子斗月於同所授与之色衆十口

教—禪寬阿 詠、覺明 護—最尊 嘆德宗範 神供隆惠

俊助卅一 越後阿：

永久六年三月八日庚寅於同院受之色衆十二人

教—兼覺 詠、兼意阿、護摩永嚴阿、嘆德嚴寬阿、

禎意卅八 相模法律師 實乘房
久安二年十月十一日卒六十七

(第16紙)

元永二年二月廿六日壬午室月於同院受之色衆六人

教授兼覺 詠經覺任 護摩永嚴阿、

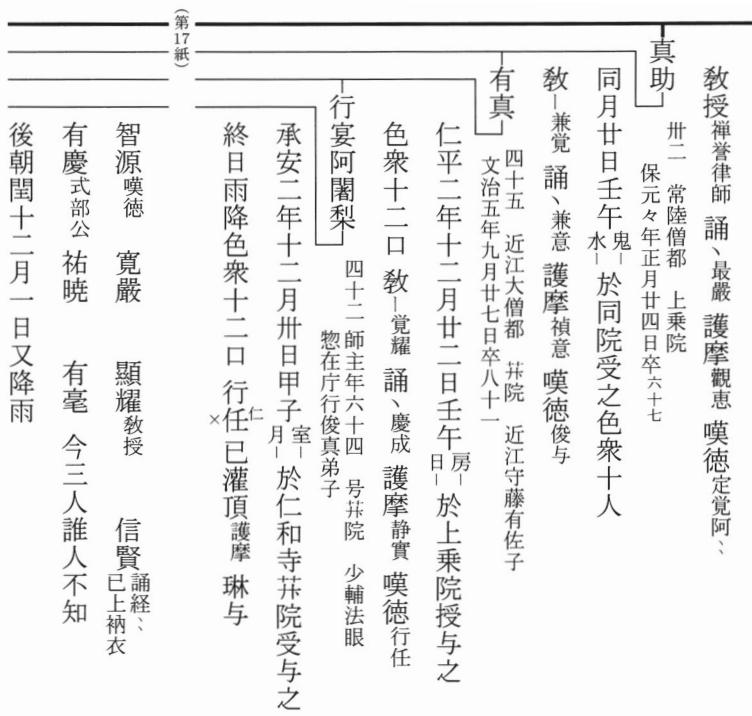
俊意四十一 改寬覺 肥前阿：

保安元年十二月十六日壬午張木於同院受之色衆八人無烈

教—兼覺 詠、兼意阿、護摩永嚴

顯意卅六 刑部卿阿：

同二年九月十八日庚辰參月於同院受之色衆十二人



禪覺廿一 師主年六十三

建久五年十月十三日庚午昂一於菴院受之色衆十二口
教一隆憲阿、誦、賢運阿、護摩豪耀阿、嘆德信賢已、

理深阿闍梨 越後已講

同七年正月十七日丁酉角、土、於同院受之色衆八口

信賢律師、
律師誦經導師、
隆憲教授、
公真阿闍梨、
護摩

融賢散花

兼仁公讚
弁宴入寺

行耀、

禪覺阿闍梨

快苑大法師尊乘房阿闍梨高野

同八年十二月二日庚午危一於同院受之色衆十口

信賢咒願嘆德、
隆憲教、
阿闍梨豪耀唄

公真護摩

尊雲誦經、
已上衲衣

隆賢散花

禪覺頭、
神供

入寺弁宴

行耀堂達、
已上讚衆

聖範阿闍梨五十六 禪蓮房

同九年十月六日庚午虛金於同院受之色衆六口

隆憲教授 公真護摩 理深神供

弁宴

行耀堂達 阿闍梨禪覺誦經導師

信賢阿闍梨宰相律師 中納言資信子

治承四年四月廿二日甲辰室一於同芥院所受與之色衆六口

㉓

教授行宴誦、林与護摩行仁

㉔

真幸二十七大輔律師 西方院 法橋真慶子
建久元年七月十九日卒六十三

久壽元年十二月廿四日壬寅尾金於同院授與之色衆十六口

教—覺耀誦、有真護摩禪壽嘆德明覺

定修藏人阿闍梨

同二年十月廿九日癸卯尾金於鳥羽僧房授之色衆六人

教—覺耀誦、有真護摩慈珍嘆德神供智源

智源卅五 肥後日講

同十一月廿五日己巳心水一於同僧房授与之色衆八人

教一覺耀誦、明覺護摩仁證嘆德有真六イ初後無列

覺鑊上人二十八六イ正覺房23

保安二年九月廿一日癸未柳一於同院受之色衆六人

教一兼覺法橋誦、最嚴阿、護摩永嚴阿、

(第19紙)

無烈有教誠子刻許結願了即時曳布施

真譽

五十四

重受
金剛峯寺檢校并傳法院座

24

号持明房

同三年十月廿日乙巳星一月一於池上相承房受之色衆十二人

教授兼覺誦、覺仁護摩永嚴阿、嘆德最嚴阿、

行範

改寬延或信肅云。大夫律師久安二年二月廿五日卒五十四

大膳大夫家範子

同年十一月廿五日庚辰心一月一於成就院受之色衆十二人

教一兼覺誦、最嚴護摩永嚴嘆德觀惠

寬源六十五 丹波阿、徳大寺

同五年一月廿五日甲辰_{室木}於同院受之色衆八人

教—兼覺誦、範覺護摩慶嚴嘆、最嚴阿、

三十三山城僧都嚴淨院中務少輔藤宗兼子

仁平三年七月六日卒七十六

宗範

同年三月一日戊寅_{胃水}於相承房受之色衆十人

教—兼覺誦、最嚴護摩永嚴阿、

依大雨從緣一行烈後朝無烈無嘆德

宗親_{卅三入寺或阿闍梨}^七_廿

平治元年九月五日乙酉_{奎土}於嚴淨院授與之色衆十口

教—寬瑜誦、寬然護摩兼源於車護摩堂衆教誠有之

靜惠正定房上人入道

同六日丙戌_{婁日}於同所受與之色衆六口

教一寛瑜 詠、範祐 護摩 寬果

慶成五十四 嘉應元年二月十八日卒年六十一丹波法橋 安房守季房子

應保二年六月十六日辛巳虛日於同所受与之

色衆八人教一寛瑜 詠、範祐 護摩 寬果

範祐五十五 掃部阿闍梨

同三年正月三日甲午奎木於同所受之色衆六口

教一慶成 詠、寛果 護摩 尧真

俊幸四十 改水 建仁三年八月十七日卒於高野入滅。年七十七宰相法橋 大皇大后宮亮源師國子

永万二年三月卅日癸酉畢日於同所受与之色衆十口

教一寛瑜 詠、範祐 護摩 寬果 神供宗親 嘆德慶成

信證廿七号堀池三宮僧正後三条院第三御子輔仁親王男26康治元年四月八日入滅四十五

保安五年三月十三日庚寅角月於觀音院傳受之

色衆廿人僧綱四人教一禪与僧都 詠、定覺阿、護摩觀惠阿、

嘆德兼成律師 觀音院御所燒失之後未造故以灌頂堂

正面間為敎誠所布施取人々 内大臣 左衛門督

別當 左兵衛督 宰相中将 殿上人等多参会之

内大臣殿自當月御參宿大阿、御布施令取給自大僧正

御房大師御筆令獻內大臣殿給_{云々}

覺譽_{五十七} 号木寺民部卿阿、

保安五年三月十六日癸巳_{金房}於相承房授之色衆六口

無烈敎_一兼覺誦、最嚴阿、護摩永嚴

忠觀_{三十六} 兵部卿阿、

同月廿三日庚子_木於成就院授之色衆十人

敎_一兼覺誦、源意阿、護摩慶嚴 嘆德定覺阿、

實縁_{二十八} 左大臣阿、左大臣俊房公息

同月廿七日甲辰_{婁月}於同院受之色衆十二人

敎_一兼覺誦、嚴寬護摩觀惠嘆_一兼成律師

寬遍本名勝源 尊壽院大僧正 大納言兼中宮大夫源師忠子
廿五 仁安元年六月卅日卒

27

天治元年十月二日乙巳尾日 於同院受之色衆十人

教一兼覺誦、真助護摩源意嘆德最嚴阿、

行雅二十四淨名院阿、大納言源雅俊子

同年十一月七日庚辰奎日 於北院受之色衆廿人之内僧綱四人
教一禪与僧都誦、範覺阿、護摩慶嚴阿、嘆德最嚴阿、

(第
22
紙)

寬證三十二丹波阿、丹波守高階為章子

同月十七日庚寅胃水 於成就院受之色衆十六人

教一禪与誦、範覺阿、護摩慶嚴嘆德最嚴

行助二十八池上侍從阿、四位侍從藤宗信子

同月廿一日甲午角日 於同院受之色衆六人

教一兼覺誦、覺仁護、慶嚴阿 乍六人居堂內夜

内曳布施了前後饗略之初夜粥漬許也

「實意」四十五 石山別當春宮大夫藤公實子
仁平三年八月日卒七十三

同月廿九日壬寅斗於同院授之色衆十人

教一兼覺法橋 詠、覚任 護摩實寬阿、嘆德最嚴阿、

(五行分ホド空キ)

(嘉慶元年霜月下旬之比類)

聚了 墓濟生廿八

(第2紙、琳助条「實叡公」裏書)

琳助—實叡

行慈上人

勤果 性禪 高弁

寬祥 良耀法印

定深
賢範
靈典
行譽
定毫
法橋

東寺觀智院金剛藏
『本朝真言血脉第一廣澤』

(148
箱
4号) の調査報告と翻刻

注

（内題）、紙端ト寛助行トノ空キ狭ク、本文同筆ナガラ補入ト見ニ。

（朱書）。

（永嚴行頭）、朱書『保壽院流祖』アリ。（双注左行末）法印・權

少僧都、墨抹。

賀茂、墨線ニテ（本文行ノ）「日」ニ接続。

六、「四」ラシキ字ニ重書ト見ユ。

成、ママ（常）。

詮、「證」二重書。

（範覺行頭）、朱書『心蓮院流』アリ。

童、ママ（幢）。

略、存疑。

童、ママ（幢）。

欠、ママ（坎）。

長喜、ママ。「植喜」トアルベキ力。

東寺西院、墨線ニテ「同」ニ接続。

天養元年、墨線ニテ「同年」ニ接続。寅、不明字二重書。心蓮院、

墨線ニテ「同院」ニ接続。

* *、「タス」ノ如キ字アルモ解ヲ得ズ。八、墨抹。

（双注右行ノ）寛繼阿ヽ・兼賢阿ヽ・長幸阿ヽ、墨抹。

嘆徳、墨線ニテ前行「道具」上ノ補入符ヲ指示スルモノノ如シ。

（三品親王行頭）、朱書『花藏院流祖』アリ。

井院、墨線ニテ「同」ニ接続。

林、ママ（琳）。

（覺鑊上人行頭）、朱書『傳法院流』アリ。

（双注右行末）「主」脱、ママ。

（信證行頭）、朱書『西院流祖』アリ。

（寛遍行頭）、朱書『忍辱山流祖』アリ。

27 26 25 24 23 22